

偶 感

中 野 正 順

以上三氏の報告講演は、各自がイギリス或はアメリカで研究或は視察された体験を単に報告されたわけではなく、何れもわが国英語教育界に存在し、英語を教授する私共が直面する根本的な問題を踏まえて話され、またそれを拝聴する私どもも英語を教授するものとして food for thought を与えられたのである。だからシンポジウムのプログラムとして、当然三氏の講演のあと、聴衆の間からこれらの問題に関して講演者に対し活潑な質疑応答を予定していたが、何分にも時間が午後一時から三時までに制限され、講演者の話しが意外に時間をとったため討議の時間が余り残らなかったことは司会者の不手際としてここにお詫びしたい。ただ尾崎氏と安藤氏との間に簡単な応酬があって、それに関連して司会者が感想を洩らしただけであったが、何分にも京大英文学会初めての試みであったことにかんがみ、今後ともこんな機会が度々もたれることをここに望んでおきたい。

この講演の内容的特徴の一つは、尾崎氏がイギリスを安藤氏がアメリカを見て来られたわけあって、両氏の報告された外国語としての英語教育がそれぞれイギリス的とアメリカ的特性を示していたことは自然の勢いであろう。尾崎氏が、イギリスでは英語の教授は余り細かいことをいわず、その環境をととのえて自然に学習せしめるようで、その特色は文化的であるが、それに比してアメリカでの教えかたは能率的であるといわれたのが、一見アメリカの教授法が単なる機械的なものとか、ただ能率的なものだけに限られているといわれたように響いたので、安藤氏から応酬があったが、アメリカとても何も能率的なものだけをとりあげるのではなく、それは言語学習の基礎的方法としてとられるもので、言語の根底となっている文化的要素を忘れてはいない。だがそれは全面的な特性ではないが、外国語としての英語教授には、尾崎氏の指摘されたように、イギリスのものは文化的でアメリカのものは能率的であることは確かである。というのは司会者は、アメリカの大学視察旅行の終り頃4月23日から27日に互りカリフォルニア州パサデーナ市のハンチントン・ホテル（最後日は UCLA で）開かれた「ナフサ」（The National Association of

Foreign Student Advisers) 大会の英語部会に出席し、英米における「外国語としての英語」教育に従事する学者たちの講演や討議を拝聴したが、そのときにも上述のような英語教育に関する英米の特色を窺取することが出来た。一口にいえばイギリスの英語教育はアメリカに比べて教養的である。イギリスの講演者の一人は冒頭で「政治的観点を離れて」といって聴衆の爆笑を買いつつ、歴史的にすすめられ、話しのうちにもその英語教育は植民地政策と密接な関係をもっていることはかくせず、その方法は主としてインドやアメリカで発展したもので、国内ではアイルランド、ウエールズ、スコットランドといった地域の統治と密接な関係をもっていたようだ。だからそれらの地域における英語教育は一般教育の重要な地位を占め、英語を通してイギリスの文化を与えようとする。従って言語技術の修練と共に人間的教養の重要性を強調する。それは一言にしてヒューマニスティックであるといえよう。これに比べるとアメリカの英語教育はバタン・ブラクティスのように機械的であり、標準化の傾向が著しい。大会の質疑応答のうちにもこの問題が出て、アメリカの方法は余り機械的ではないかといった質問に対し、現代アメリカにおける英語教育は専らインテンシヴ・コースの原理から、或る一定期間内に学習作業の効果をあげようとする限り、勢いその方法がキカイ的、或は標準的になることは免れないというアメリカ側の応答であった。蓋し大戦の要請によって起った所謂 Army Method といい、多種移民のアメリカ文化への吸収といい、またアメリカの大学における多人種の外国留学生のための英語訓練といい、何れもインテンシヴ・コースという能率的な方法をとったことは尤なことである。

このようにアメリカの英語教育は一見キカイ的であり、能率的であるために、アメリカ的方法は徹頭徹尾キカイ的なものと速断され、殊にアメリカにおける「外国語としての英語」の教授と学習は、上述のような要請を背景に、最近の文化人類学の研究に刺戟されて、「話しことば」の上に立ち、それを強調する余り、それは文化や文学の表現に用いられている「書きことば」を軽視しており、従ってその方法は知的でなく、人文的でないとした誤解や非難がしばしばなされている。これに対し昨年9月までミシガン大学英語研究所々長であったマークワット教授 Albert H. Mackwardt は、(1)「話し方」をもって言語の学習と教授における唯一のものであるというのではなくて、その第一歩であり、基礎であるということ、(2)「書きことば」は「話しことば」と同一のものでなく、その変形

であるということを、非難者に指摘し、また言語学者にも反省を求めている。これに關聯して、同教授は「書きことば」と「話しことば」との間の構文の差異、例えば punctuation と suprasegmentals の関係とか、単文、重文、複文の文型や、修飾辞殊に副詞、副詞句、従属文などにおける「書きことば」と「話しことば」との比較研究がなされるべきであることを提言している。

何れにしても「始めに話しことばあり」で、言語の教授は「話しことば」から出発しなければならぬという原則は、何もアメリカの専売でなく、歐洲では音声学の立場であるけれども言語教育に「聞きかた」と「話しかた」の重要性を唱導したのは、イギリスの H. Sweet (1845-1912) と、彼の影響をうけたデンマークの O. Jespersen (1860-1943) であって、前者には音声学に関する数々の著書以外に *The Practical Study of Languages* (1899) と、後者には文法に関する天下周知の名著以外の *How to Teach a Foreign Language* (1904) とは、現代の英語教育界に大きな影響を及ぼしたものとして忘れられない。だから司会者がナフサ大会に出席して聞いた歐洲側の英語教授に関する何れの意見も「話しことば」の上に立っていることは、アメリカと変らない。ただイギリスのは音声学の上に立っており、それに反しアメリカのは音声学の上に更にアメリカン・インディアンの研究に端を発した文化人類学に影響されて「音素」phoneme と「対比」contrast の概念に立つ言語構造の科学的分析という新しい客観的要素が加わったため、アメリカでも言語学において文化的要素を重んずる (e. g., *Linguistics Across Cultures* by R. Lado) が、英語教育の実際になると尾崎氏の感じられたようにイギリスでは対人関係における環境を整えることによって学習と教授の効果をあげるに反し、アメリカでは前述の時代的要請も手伝って集中的、能率的になったのだろう。(「人文」10集、拙文“アメリカの大学における外国語教育”参照)。そういうわけで尾崎氏はイギリスでは殊更英語教授法というものはお目にかからなかったと云われたが上述のようにイギリスでも「話しことば」を重んじている限り基礎的な教授にはその方法がない訳ではなく、そのような尾崎氏のうけられた印象は恐らく同氏が学ばれたのは advanced class であったためで、他方同氏も述懐してられるように、beginner class に出席していられたらもっと speaking と hearing の上に立った組織だった方法が見られたかも知れない。

その点安藤氏は、アメリカにおける現代英語教育の発祥の地ミシガンで本格的に学ばれ

ただけあって、その報告は間然とする所がない。それだけわが国の英語教育の立場から見て、学ぶべきよい点もあると同時に私どもの実状に沿わない点もないではない。これは同氏の報告を聞いての上ばかりでなく、司会者自身がアメリカの各大学における英語教育を実際に視察した際にも感じたことである。だがアメリカの英語教育の最大特徴は、安藤氏も述べられているように、Applied linguistics の観点に立っているということである。今日の英語教育は、言語の本質の研究から打たてられた Descriptive linguistics の原理を実際に応用されたもので、今後は更に Generative linguistics といった新しい方向が擡頭して来たように、絶えず言語の本質に関する研究の上に立って英語教育に対する方法が考えられている。これは私どもも大いに学ぶべき点であって、わが国の英語教育界にも大分とり入れられて色々の新しい計画が実施されているが、問題はこれら計画は未だ初級、中級の英語教育に集中されて上級の英語教育に就いては考えられていないということである。安藤氏も指摘されているように、アメリカの新教授法は英語学習の最初の approach に関するもので、日本の大学における advanced class の扱い方になると満足な答が得られないのである。わが国の英語教育界の実際を考えて見ても、初級、中級の英語教育にはブラクチャル・イングリッシュと銘打った新しい方法が唱導されて行くようだが、上級の英語教育、即ち大学の英語教育ではブラクチャル・イングリッシュよりも教養英語に重点がおかれている。その主張は正しい。但し問題は、初級、中級の所謂ブラクチャル・イングリッシュは主としてアメリカの Applied linguistics の原理に基くからには、その教材と方法に計画性があるが、これに反し教養英語なるもののは実際は教養という理想にはかなってはいないが、教材の選択が教えるものの自由にまかされ、主として translation-grammar の方法によって行われているため、言語の本質といった点からいえば無計画性である。成程尾崎氏のいわれるように大学では教養英語を教えるべきであり、また一般に教養英語は英語を通して教養を教える、或は教養を通して英語を教える」と主張されているが、実際にはそのときの英語はいつのまにか日本語にすりかえられているのである。だからといって私は日本語の使用を絶対禁止するものではない。日本語は理解の一の手段として意義がある。英語が自国語であるアメリカにおける英語教育が English only という原理は、日本の実情に沿わない。アメリカにおいても英語以外の一般外国語の学習と教授には学習者の自国語の使用を禁止していない。その点私どもが日本にいて英語を学ぶ際に非常に参考にな

る。アメリカの大学における一般外国語は、現在は英語と同じように *aural comprehension* と *oral fluency* を目標に *hearing* と *speaking* から始め、それが終って *reading* と *writing* にすすみ、教材は言語の *skills* を学習するものから文化と文学に関する教養外国語に這入って行く。その際 *skills* 学習の時期は主として学習する外国語 *only* であるが、教養的なものになると理解の手段として自国語が用いられる。それは逐語的な *translation* でなく、外国語の内容と自国語の内容が該当する点、即ち両者が心理的に一致する *preverbal level* においては、自国語を用いてもよいと考えられている。だから極端な場合として外国文学の鑑賞に英語の対訳を用いる場合がある。問題は、かく自国語を用いて理解するという作業丈けに止めておいてよいかということだ。これが上のような只の鑑賞とか、英文学や独文学の研究丈けの点から云えばそういった作業は許されるだろうが、それは自然科学の研究において参考知識を得るために外国文献をよむ態度とかかわらなく、いやしくも教養英語として教養と同時に言語を教えるという立場からいえばそれでいいであろうか。教養英語をただの鑑賞英語或は知識英語丈けにとどめておくと、新しい時代の要請による中・高校英語教育と大学英语教育との間にギャップが生じて来るだろう。これは何も中・高側に屈服せよと云うのでもなく、また徒らに時流に順応するというのでもなく、私のいいたいことは従来の所謂教養英語はあくまで強調し、またすべきであるが、同時に言語の本質論から従来の大学の英語教育が忘れていたものを勇敢にとり入れよということである。今後の大学の英語は鑑賞用丈けに止まらないで時代の要請に応じて国際性をもたねばならぬ。これは教養英語の教授に従事するものの義務である。抑も言語—文化—文学といった関係を考えると、始めに「話しことば」ありで、人間の集団生活におけることばによる対人関係はいろいろの *ways of life* 或は *attitudes* 即ち文化を生み、更に人間の美や感情をことばで伝達するためにことばの芸術、それは主として *metaphor* というテクニックを用いたことばの世界即ち文学が生れたもので、「書きことば」が出来て以来文学は「書きことば」の芸術と速断され易いが、文学の本質は *oral literature* でなければならぬ。伝統的に見ても *aural literature* は *written literature* に先行することは事実であって、私どもは *written literature* における *audio-lingual* な要素を見逃がしてはならない。ここに私は前述の Mackwardt 教授の「書きことば」は「話しことば」の変形であるということに深い意義を見出だす。こういった一の観点からでも文学と語学を近づ

けることは出来ないだろうか。また一般的にいつて文学の時間にそれを用いて aural comprehension と oral fluency のための language skills の訓練をしてならないという理由があるだろうか。決して語学と文学とは矛盾するものではない。literature も culture と同じように language skills の上に立つべきである。practical English は単なる Guide English や Commercial English でなく、英語の本質からその reading と writing に対する hearing と speaking の面であり、recognition に対する production の面であり換言すれば culture や literature の基礎をなす aural-lingual の要素である。抑々 practical English と cultural English とを分けることは言語の本質上どうかであって、それは学習の段階における便宜的な分割で、それは人間の発達過程における子供と大人の区別のようなものであって、本質において一つのものでなければならない。但し advanced class において課する language skills は、lower class のそれと余り変わったものではないが、この段階では skills が適用される内容が教養的であること、教養のみに偏して言語の本質が失われることの防止に役立つ所に意義がある。こういった点からも、安藤氏の提唱するように、大学における英語教育が研究の対象になるよう望んでやまない。

最後に大浦氏はアメリカの大学において実施されているいろいろな英語試験の形式を紹介されて興味が深かった。英語の試験の形式と内容は、氏もいわれるように、英語の学習上の目標を示すものとして重要な意義を示すもので、この意味からいえばアメリカにおける「外国語としての英語」の試験は、安藤氏の指摘された Applied linguistics としての英語教育と同じく、linguistics の原理の上に立っている。即ち audio-lingual approach の立場から hearing, speaking, reading, writing の四能力を試めするのが原則である。そういった代表的テストの基準を示したものは Prof. R. Lado の Language Testing, The Construction and Use of Foreign Language Tests で、これによれば contrastive analysis の立場から、テストの内容として発音上の問題、文法の構造上の問題、語彙の問題、並に言語に関連した社会的文化的意味の問題を aural-lingual の形式によって test するのである。いづれにしてもテストは教授と学習の目標を示すものとするれば、ここにテストの果す二つの重要な役割が考えられる。1) 英語教育を Applied linguistics と考えるならば、class における学習作業は linguistics の原理に沿って色々計画されたテスト形式をそのテクニックとして採用すること、2) それによって学生の能力を判別し、多面的な英語教育

を実施することの二つの方面にテストは役立つだろう。殊に第二の点に関し、大浦氏はUCLAのPlacement Testを紹介されたついでに、学生の能力を無差別に一組に集めて英語を教えている無意義さを概嘆し、学生の能力別と目的に応じて色々のクラス編成を提案されている。理想として司会者も同感である。学生の学習効果をあげるための一方法として日本でもlower schoolで昔から能力別によるクラス編成が試みられ、それなりに或る程度の効果をあげると共に、他方学生個人の心理的影響や学校全体の行政的事情で、教育界全体に行渡らないようで、結局能力無差別のクラス主義が大勢のようである。アメリカのように英語を教えるclassの収容人員が日本に較べてそれ程多数でない場合と異って、京都大学におけるように英語は殆んど学生の必修科目であり、全カリキュラム編成上一クラスが60名近いものから成っている場合、全体を能力別によってクラス編成することは事実上不可能のことであって、理想に対するこういった現実と直面すると英語教育の絶望感に襲われる。一体能力別指導の理想は、学生の適性、目的、環境に応じた個人指導でなければならぬ。この観点からいえば日本に比べて少人数のアメリカのクラスでも理想とはいわれない。これに関連して憶い出すのは、私がアメリカ視察中インディアナ大学で参観したProf. Albert Valdmanのフランス語の実験計画である。ASTP以来アメリカの各大学ではインテンシヴ・コースを大学課程にとり入れて来たが、そのうちでも新鮮な試みとしてコルネール大学のカリキュラムは典型的のものであった。それでもまだ 1) 学科内容が学期制に分けてあること、2) クラス全体の指導であって、個人の語学的適性とか、学習動機とか、環境などを無視していること、3) 教師中心の教授時間であるといった性格を具え、こういうOne-teacher-one-classroom制度に対し、ヴォールトマン教授はelectronic facilitiesとprogrammed instructionの原則の下に個人指導を主旨とする多面的な計画を打たてたのである。1) 従来のクラス全体の指導でなくて、個人の自動的学習が出来るように計画された教材、即ちteaching machineの原理に立ってその実施をLanguage Laboratoryで行う、2) クラス人員を30名に限定するのがその特色である。そして教材用テープは、先ず発音と文法の点からフランス語の「話しことば」の表現を断片的に一歩一歩順を追って自習出来るように配列し、漸次ダイアログと物語の形式によって教養的内容のものをつけ加える。そしてそのテープは学生各自が勝手にテープ・ライブラリから選択する。進度は学生の自己テストと教師のアチーブメント・テストによって測

られ、LL 内の作業はよく訓練された実験室助手の指示によって進められるのである。(詳細は「人文」10集拙文“アメリカの大学における外国語教育”参照) 京都大学にもいづれ Language Laboratory が設立される予定であるが、その運営はそれぞれの目的に応じていろいろの方法がとられるだろう。ただ外国人のナマの発音に習熟するために既製のテープを聞かせたり、外人吹込のレコードを流すばかりでなく、class における学習内容と密接に関連したテープによる外国語の訓練を行うとか、進んではインディアナ大学におけるような個人指導を目的とするために計画されたテープを作製するまでに研究されることを望みたい。大学の制度では、能力別によるクラス編成と個人指導は不可能なことであって、これ等の bottlenecks をうち破る一つ的手段として、上のような方向への LL 運営の研究が重要な課題となるだろう。